

幼い子供の持つ広東語と香港手話の語彙知識を試験する フェリックス・シ、シェリル・トン、デイヴィッド・ラム (香港中文大学 [中国])

要旨

本稿では、18 か月から 30 か月の広東語と香港手話の話者である幼児のために、我々が開発している 2 つのコンピュータ化した語彙テストの最近の成果について発表する。これは我々が進めている、第二言語として保育園で香港手話を学んでいる、聴者である幼児のグループの広東語と香港手話の語彙の発達の記録を目的とするプロジェクトの一部である。

先行研究によれば、手話言語の学習は、典型的には就学前の聴覚障害児の口話の発達を、彼らが手話を第一言語として (Orlansky and Bonvillian 1985 など)、もしくは第二言語として (Daniels 1994) 学んでいるかどうかに関わらず、促しうるといふ散発的な証拠が示唆されている。我々のこの調査プロジェクトでは、18 か月から 30 か月の聴者で、香港手話を保育園で学んでいる幼児のグループのバイリンガルな語彙の発達を調査することを目的としている。そのためには、このような幼児の言語知識を有効に引き出すような、言語評価ツールが必要となる。2 歳未満の幼児の早期の語彙の発達を調査するための、2 つの伝統的な方法論としては、MBCDI (MacArthur-Bates Communicative Development Inventories, 8 か月から 30 か月) と、選好注視法を採用した受容実験がある。MBCDI は長い語彙リストの質問表である。両親がそのリストに目を通して、子どもがこれを理解し、適切な文脈で使用することができるかどうかを判断する。しかしながら、MBCDI に対する批判としてよく出るのは、この両親の報告が信頼できないというものである。一方で選好注視法は一般に幼児の知識を引き出すのに有効な方法論として受け入れられているものの、その実験を設定するのに要する労力と、注視データをコード化するのに費やす時間がかかるというマイナス面がある。このような問題点に鑑みて、2 つの伝統的な方法を補完するために、タッチスクリーンの技術を用い、コンピュータ化された理解度テストの開発を提案してきた研究者たちがいる (Friend and Keplinger 2003)。この種のテストにおいては、幼児たちはターゲットの語を聞き、スクリーンの正しい絵に触れるように言われる。これが正しく試みられれば、聴覚信号の補強のトリガーとなる。この方法は 16 か月の幼児には有効に機能することが示唆されている。

本稿では、Friend and Keplinger (2003) に基づいて我々がどのように 2 つの、1 つは広東語の、もう 1 つは香港手話のコンピュータ化された受容語彙テストを開発したのかについて発表を行う。ここでは語彙の選択、テストのデザイン、刺激の出し方、そして聴者である保育園の幼児たちに我々が最初に行った試験運用の結果について議論を行う。広東語と香港手話の双方のスコアは幼児たちの年齢との相関を示し、幼児たちは第二言語としての香港手話の知識を着実に進歩させていた。ほとんどの幼児の一貫性のレートは応答において 80% より高

い値を示し、そのパーセンテージは年齢とともに上昇した。我々の現在までの予備的な実験の成果は、このテストのフォーマットが22か月児の幼児に対して適切に使えることを示唆している。

参考文献

- Daniels, M. 1994. The effect of sign language on hearing children's language development. *Communication Education* 43(4), 291-298.
- Friend, M. and M. Keplinger. 2003. An infant-based assessment of early lexicon acquisition. *Behavior Research Methods Instruments and Computers* 35(2), 302-309.
- Orlansky, M. D. and J. D. Bonvillian. 1985. Sign language acquisition: Language development in children of deaf parents and implications for other populations. *Merrill-Palmer Quarterly* 31(2), 127-143.